

## 脆弱性・依存性・応答性をはらむ行為者性概念へ ——現代行為論からケアの倫理へ——

早 川 正 祐

### 1. はじめに

「行為者性」の概念は、(理由という次元での) 合理性・自己・自由・責任といった人間に特有な事象と結びついた厚みのある概念であり、だからこそ、その具体的な内実を解明することが、私たちの根本的なあり方を理解する上で必要不可欠なものとなる。こういった事情ゆえに、人間の行為者性 (human agency) の解明は、現代行為論における一つの中心的な課題になったと言える<sup>(1)</sup>。本稿では、行為論のこの中心的な問題について、ケアの倫理における洞察を部分的に取り入れ、かつ展開しながら、考察することを目的とする。このような方法をとるのは、人間存在の「依存性」(dependency) や「脆弱性」(vulnerability) を中心に据えるケアの倫理の洞察が、現代行為論の多くの論者とは異なる仕方で、人間の行為者性を解明する重要な手掛かりを提供するからである。

とはいえ、行為者性を論じる仕方に関して、現代行為論の議論全般に例外なく妥当するような本質的な傾向があるわけではない。現代行為論の代表的な論者たちは、共通したテーマについて論じつつも、それぞれ独自の問題意識をもっており、互いに異なる仕方で人間の行為者性の解明に貢献している。しかしながら、この点を認めつつも、(後に確認するように) 主流の行為論に幅広く見受けられる根強い傾向として、「自足的な合理的能力ないし合理的制御」の重視という点を指摘することができる。ここで私が言う「自足的」とは、他者に対する応答的な志向が(比較的) 希薄であるということ、もっと平たく言えば、他者のニーズをあまり念頭に置かないということを主に意味する。「自足的な合理的能力ないし合理的制御」の重視という傾向がどれほど強く、また徹底した形で現れるのかは論者によって一様ではなく、程度の差がある。(後で見るように) 自足性という点に関して言えば、1990年代以降の行為論において、それ以前の行為論よりも、その傾向性が一層強まる。いずれにせよ、本稿では、現代行為論における代表的論者の考察が、人間の行為者性の解明に大きく寄与するものであった点を踏まえつつも、そこで支配的であったのは、他者に対する応答性を十分には考慮していない——まったく考慮していないわけではないが——行為者性概念であった点を確認する<sup>(2)</sup>。そしてそのうえで、その重大な欠落が、ケアの倫理に内在する行為者観を踏まえることによって修正されることを示したい<sup>(3)</sup>。

むろん、ケアの倫理自体は、人間の行為者性の解明を第一の主題としているのではなく、他者へのケアという観点から、人間の倫理的なあり方を批判的に捉え直しつつ、構想するものである。しかし、そういった他者志向的なケアのあり方も、自他の関係性に規定される、私たちの行為者としてのありようの主要部であり、それゆえにケアの倫理には、人間の行為者性をど

のようなものとして捉えるかに関する深い洞察もまた潜んでいる。とりわけ注目すべきは、ケアの倫理の論者が、これまでの行為論ではあまり注意が払われなかった人間の依存性・脆弱性に注目し、そこから他者に応答的な行為者像を導き出している点である。そこで本稿では、現代行為論の大きな流れをごく簡単に概観したうえで、こういったケアの倫理の考察が、行為論における（比較的）自足的な行為者像を修正する重要な意味をもっていると論じたい。

## 2. 現代行為論の大きな流れ

現代行為論は多様な問題関心を含む分野であるがゆえに、その特徴を一掴みにして述べることは難しい。しかしながら、極めて大まかに言うことが許されるならば、分析系に属する現代行為論の論者の多くは、行為者としての人間の特徴的なあり方——人間的な行為者性——を、理由に基づいて行為するといった合理的な能力や合理的な制御に重点を置きながら分析してきた。たしかに、こういった流れに批判的な論者は存在した（例えば Arpaly 2003）。また、一口に合理的能力・合理的制御と言っても、その捉え方や重点の置き方は論者によって異なる。しかし、それでも主流の論者は、合理的能力やそれに基づく制御を重視したアプローチをとる比較的強い傾向がある。ごく簡潔にはあるが、まず、この傾向性を、行為論の代表的論者である三人、アンスコム、デイヴィドソン、ブラットマンの議論の概略を示すことで確認し、そのうえで、やや自足的な性格もそこに見いだされる点を確認しよう。なお、ここでの概観は、あくまでも合理的能力や合理的制御の重視やその自致的性格を確認するためのものであるため、取りあげる三人の論者の概観として、限定的なものに留まらざるをえない点をあらかじめ断っておきたい。

### （1）アンスコム

現代行為論の創始者とでも言うべきエリザベス・アンスコムは、行為者性を意図や意図的行為の次元で問題にした。このように意図（意図的行為）が哲学的分析の対象になった背景には、責任の帰属をめぐる問題への彼女の深い関心があった（Geach 2005 : xiv, xviii ; 佐藤 2016）。この点は後で触れるとして、まず行為者性に関する彼女の考察において特徴的な点は、行為者本人が自分の振る舞いについて理由を把握しているという合理的な能力によって、意図を構成する行為者性を捉えようとする点である（Anscombe 1957）。アンスコムによれば、行為者本人が、誰かから「なぜそうしているか」と問われても、その行為の理由を即座に回答できること、すなわち、わざわざ観察することなしに行為の理由を知っていることによって、その振る舞いに意図性（行為者性）が帰属されるのである。このようにアンスコムは、「（行為の理由に関する）他者からの問いかけに対して本人が回答できる」という、三人称的に特定可能な事態において、意図性のありかを見いだす。その点において、彼女の特徴づけは、意図ないし意志を、（本人のみが確認可能な）心の中で生起する私密的な状態として特徴づける古典的意志理論からの大きな前進であった（門脇 1996 : 173-84）。また、こういった意図の脱心理化に伴い、

アンスコムにおいては、行為の理由を示す実践的推論も、行為を引き起こすことになる心的原因としてではなく、本人が自分の振る舞いに関してもつ合理的な理解——行為理由の理解——の構造を表現するものとして捉え直されることになる（Anscombe 1995）。このようにアンスコムは、行為の理由を行為の心的原因から区別し、後者でなく前者を重視したうえで（行為の反因果説）、理由に関して行為者本人がもつ了解の観点から行為者性を捉えようとした。

とはいえ、こういったアンスコムの特徴づけを、合理的制御の重視として特徴づけることができるのかどうかは微妙である。というのも、「実際の行為において、理由に関する知——何が目的で、何がその手段になっているかという目的・手段連関についての知も含む——として体现されている合理的能力が、首尾よく行使されることで、振る舞いが制御される」とまではアンスコムは言っていないからである。しかし、にもかかわらず、「なぜ（どういう目的で）その行為をしたのか」という理由に関する本人の把握や知によって、行為者性の帰属が認められているがゆえ、アンスコムは合理的能力の観点から行為者性を考察したとすることができるのである。

## （2）デイヴィッドソン

アンスコムに後続する代表的論者であるドナルド・デイヴィッドソンが中心的に取り組んだのは、行為における合理性と因果性の関係の究明であった。そして、そこでも合理的能力およびその能力による制御は、行為者性の中心的な特徴として保持されている。

デイヴィッドソンはアンスコムと異なり、行為の理由だけではなく行為の原因もまた重視する。デイヴィッドソンによれば、ある一組の欲求と信念、例えば「Xしたい」という欲求と「YすればXすることができる」という信念が、ある行為Yを支持する理由になっていても、そのような行為理由の存在は、行為Yを為すことの必要条件であって、十分条件までにはなっていない。意図的行為が成立するためには、理由となる欲求・信念のペアが同時に「原因」として作用していなければならない。この点を緻密な論証によって鮮やかに示すことで、デイヴィッドソンは、当時隆盛していた行為の反因果説の弱点を突き、行為の理由のみならず原因も重視する「行為の因果説」を支持するに至る。

しかし、ここで見逃してはならないのは、行為者性の分析において、行為の合理的な秩序を前提にしたうえで、それを因果的な秩序と合致させることが問題になっているのであって、合理的な秩序を因果的な秩序に解消することが問題になっているのではないという点である。ここでも、「合理的な判断に従って、行為を遂行する」という意味での合理的な制御は、人間の行為者性を構成する根本的な特徴として極めて重視されている（Davidson 1980）。この点は意志の弱さの問題に対するデイヴィッドソンの取り組みからも窺うことができる。意志の弱さは、「行為者は、あらゆる事情を考慮したうえで、そうすることが最良であると考えた行為を遂行するように命じられる」という合理的制御の原則——自制の原則——からの逸脱事例であり、だからこそ「意志の弱さ」をどう位置づけるのが、合理的制御に重きを置くデイヴィッドソンの行為論の枠組みでは、大きな問題となるのである（ibid. : chap. 2 ; Evnine 1991）。

### (3) ブラットマン

1980年代から頭角を現し、現代に至るまで行為論を強力に牽引しているマイケル・ブラットマンは、長期的な計画や方針といった観点から、合理的制御の次元をより豊かに捉える。ブラットマンによれば、アンスコムやデイヴィドソンの行為論においては、ある一時点における行為のみに表れる時間断片的な行為者のありよう (time-sliced agency) が主たる関心事になっていて、時間的に拡がりのある行為者のありよう (temporally extended agency) は十分に考察されていない (Bratman 1987: chap. 2)。したがって、そこでの合理的制御も、短期的なものに留まってしまう。こうした不備を克服するために、ブラットマンは、意図というものを、長期的な計画の一部として、また同様の状況で繰り返し適用される個人的な方針 (personal policy) の一部として、大胆に捉え直す。それに伴い、合理的制御もある一時点のものではなく、通時的な性格を帯びることになる (ibid.)。

さらに、2000年代以降、ブラットマンは、ハリー・フランクファート (Frankfurt 1999; 2004) らによって展開されてきた哲学的自由論の流れを取り込み、自律的な行為者性の分析を一つの重要課題とするようになる。とりわけフランクファートの高階の欲求のアイデア、すなわち、特定の一階の欲求、例えば「健康な食生活を送りたい」が効力をもつように、二階の欲求、例えば「健康な食生活を送りたいという欲求に従いたい」によって自己コントロールするというアイデア (Frankfurt 1988) を、彼なりに発展させていく (Bratman 2007)。つまり、特定の一階の欲求を繰り返し支持するような「高階の方針」によって、自律的な行為者性を構成する合理的制御を捉えようとするのである。ブラットマンによれば、私たちは、ある欲求 (「健康な食生活を送りたい」) が本意であっても、それと衝突する欲求 (「暴飲暴食をしたい」) をもっているため、振る舞いのコントロールのみならず、欲求に対するコントロールもまた要請される。しかも、私たちは対立する欲求 (「暴飲暴食をしたい」) に一度ならず繰り返しさらされるので、通時的な一貫性を実現しようとする、欲求に対する「方針」——欲求に繰り返し適用される——が必要になる。ここにおいては合理的制御が、通時的な自己の統御という徹底された仕方で捉えられるようになるのである (ibid.)。

このように見ていくと、合理的能力や合理的制御の重視と言っても、論者によって、その重きの置き方は様ではないことがわかる。また先に触れたように、アンスコムにおいては、合理的な能力は重視されているが、合理的な制御が重視されているかどうかは定かではない。それに対し、デイヴィドソンにおいては、合理的な判断が振る舞いを制御しなければならない (自制の原則) と基本的には考えられており、それゆえ、合理的制御が重視されていると言える。そして、ブラットマンにおいては、高階の方針によって、振る舞いのみならず欲求を通時的に一貫して制御する、という自己統御的な側面が徹底的に掘り下げられている点で、より強い形で合理的制御という側面が現れている<sup>(4)</sup>。

しかし、こういった論者による差異やそれぞれの独自の貢献があったことを認めつつも、ここで着目したい点は、行為者性を構成するとされる合理的能力や合理的制御が、やや自足的な



性格を帯びている点である。そこでは、他者との関係が断絶しているわけではないが、他者の訴えやニーズに対する応答的な志向は（比較的）希薄なのである。

アンスコムとデイヴィドソンに関して言えば、この他者への応答的志向の希薄さは、行為者の分析を、意図概念を軸に行ってきたことに部分的には起因している。ただアンスコムについては、このことをめぐる事情はやや複雑である。そもそもアンスコムが意図の分析に着手したのは、意図の問題が、その行為に関する責任の問題に直結しているからであり、意図性の有無によって、取るべき責任の軽重が異なる点を念頭に置いてのことであった（Geach 2005 : xiv, xviii ; 佐藤 2016）。したがって、次のような疑問が考えられる。「責任を果たすという営みが、他者の訴えや要求に応答する志向を伴う点を踏まえるならば、意図に重点を置いた行為者性に関するアンスコムの分析は、他者への応答的なあり方に対する背景的な関心に由来するものであると言えるのではないか」と。

しかしながら、ここでは二つの点に注意すべきである。第一に注意すべき点は、アンスコムが念頭に置いている責任の問題とは、自らの意図的な行為によって他者への危害を引き起こしたことの責任をめぐる問題であり（Geach 2005 : xiv）、そこでの責任は、ヤング（Young 2011 : 97）の言う「帰責モデル」（liability model）によって捉えられるところの責任だという点である<sup>(5)</sup>。そして、このようなアンスコムの責任の捉え方は、ケアの倫理が支持する「脆弱性モデル」（vulnerability model）もしくはそれに類するモデルによって捉えられる応答責任（Kittay 1999 ; Goodin 1985）とは大きく異なる。後で見えていくように、ケアの倫理に特徴的な「脆弱性モデル」によれば<sup>(6)</sup>、ある人は、自分自身では満たすことができないニーズを抱え、依存を不可避とするから、その人に対する応答責任が生じるとされる。もちろん、これは大雑把な粗い特徴づけにすぎず、そこには様々な付帯条件が課されるし、論者によってその条件の細部は異なる。いずれにせよ、アンスコムが念頭に置く責任は、自分が為した意図的行為に対して過去遡及的に帰属される責任であるが（Geach 2005）、ケアの倫理によれば、それは狭隘な責任概念だということになるだろう。というのも脆弱性モデルでは、自分が意図的に行為を為す以前に、既に責任の問題は生じているからである。例えば、目の前に腹痛で、うずくまっている子供がいれば、腹痛の原因が私の意図的行為でなくても、そこには応答する責任が生じうる。したがって、自らの意図的行為によってもたらした害悪を起点にしたアンスコムの責任概念と、そのようにもたらされた害悪の有無とは関係なしに、他者のニーズから責任を捉えるケアの倫理に特徴的な責任概念では、大きく異なる。前者は応答すると言っても、自らの意図的行為によってもたらした害悪に限って応答的であるにすぎない<sup>(7)</sup>。

第二に注意すべき点は——これはアンスコムとデイヴィドソンの両方に関わる点であるが——行為者性分析の際に核となる意図の概念自体は、他者の訴えに対する応答的な行為にも、（アンスコムが例に挙げるような「隣人を毒殺する」といった）そうでない行為にも、適用される点である。この点は、意図に着目した行為者性分析の強みであると同時に、弱みでもある。つまり、一方で、意図に着目することで、他者の訴えやニーズに応答的かどうかの如何を問わず、両者に共通する行為者性を明らかにすることができる。しかし他方で、「他者の訴えやニー

ズに応答する」といった他者への関心と結びついた行為者性に関する踏み込んだ分析は、望めなくなる。そのような行為者のありようが、様々な関係のネットワークにまたがって存在する人間にとって極めて基本的であるにもかかわらず、である。こういった点が、意図に照準を合わせて行為者性を分析するアンスコムとデイヴィドソンの双方に当てはまる。

ブラットマンについて言えば、計画や方針という観点を取り入れた自律的な行為者性に関する議論は、「私はどのような人生を歩むべきか」「私はどういう生き方をすべきか」といった、人生や生き方に対する実存的な関心を根底に据えている点で重要である (Bratman 2007; Frankfurt 2004)。私たちの多くは、不当な仕方で自分の人生が支配され、その尊厳が脅かされることを望まないだろう。むしろ自分が心底欲していることや大切だと思うことを追求したいと思うのではないか。それゆえ自律性を構成する合理的な制御の価値は、他の様々な価値を圧倒するような至上の価値であるかどうかはさておき、私たちの実存の根本に関わるような価値を有していると思われる。したがって、こういった重大な課題に取り組んだブラットマンの議論を、行為論の大きな進展と見ることができる。

しかし他方で、そこに大きな問題がないわけではない。そこでの行為者は、具体的な人間関係に深く埋め込まれた主体であるよりも、むしろ他者との関係にはそれ程こだわることなく、自分の人生計画や方針を一途に追求する専一的な主体である。さらにその専一的な主体は、何を選好するのか選好しないのかに関してほぼ定まった完成形で登場し<sup>(8)</sup>、他者が登場するにしても、多くの場合、それは自分の行為を正当化・説明する相手としてなのである。やはり、ここでも、他者の要求や訴えに対する応答関係の中で、自らの生き方を形成していく、という側面は十分に考慮されていない。とりわけ、自分の意のままにならない他者や、自分の理解の枠組みに収まらない他者の存在によって、自分のあり方が揺り動かされたり、変容したりするといった事象は主題的に考察されていない (Hayakawa 2015)。ブラットマンにおいては、合理的制御は通時的な性格と自己統御的な性格をもち、その人の生き方にまで及ぶものとして豊かに提示されている。しかしながら、そこでは私たちの関係的な生を構成する、他者のニーズに対する応答性という要素は希薄なままであり、それゆえブラットマンの行為論は、なお自足的な性格を保持していると言える。

次節では、以上で見てきた、自足的な合理的能力・合理的制御に重きを置いた行為者性分析の不備を補完するものとして、ケアの倫理における人間理解を確認することから始めたい<sup>(9)</sup>。

### 3. ケアの倫理における鍵概念

ケアの倫理は、1980年代にキャロル・ギリガン (Gilligan 1982) やネル・ノディングズ (Noddings 1984) によって唱導された立場である。昨今は、エヴァ・キテイ (Kittay 1999) らによってさらなる進展を見せている。品川が指摘するように、「ケアの倫理の根本には、人間は傷つきやすく、だから互いに依存せざるをえない」(品川 2007: 147) という人間存在に関する基本的な視座がある。この節では、昨今、最も包括的にケアの倫理を展開しているキテ

イの考察を主として見ることで——とはいえ、キテイにはほぼ絞ったとしても限定的な概観にしかならないが——ケアの倫理の核となるアイデアを大まかに提示したい。

### （１）依存性（dependency）

ケアの倫理において特徴的なのは、人間のあり方として自立よりも、むしろ依存を基本に据えるという点である。例えばキテイは次のように力強く述べる<sup>(10)</sup>。

依存は……出生と死が生きる者すべてにもたらされる限り、どうしても避けられない。人間は成長過程が長く、道徳的な感情や愛情という否定し得ない人間の潜在能力のために、依存者へのケアが人間性の一つの指標とさえなっていると言えるかもしれない。したがって依存は例外的な状況にすぎないのではない。依存を例外とみる考え方は、人間相互のつながりが、生存のためだけでなく、文化の発展それ自体のためにも重要であることを忘れてしている。（Kittay 1999：29, 訳は岡野・牟田監訳 2010：81-2 を採用、以下の引用でも、岡野・牟田監訳を原則として用いる。）

ここで示されている洞察を、私なりに補完しつつ展開していこう。強調すべき点は二つある。第一に強調すべき点は、誰かにケアされる——誰かに気かけられ、気遣われ、大切にされる——という形での依存は、単なる生存以上の、情緒的な安らぎのある生活、心の拠り所がある生活を送るために、生涯を通じて必要なものだという点である。キテイによれば、そういった依存は、克服可能なものでも克服すべきものでもない。スロートもまた強調するように、私たちは——本人が表立って認めるかどうかは別として——「誰かしらに大切にされたい」という根源的なニードを抱えているように思える（Slote 2013：186-7）。したがって、依存が必要なのは、幼少期や、老衰していく晩年期といった特定の期間に限ったことではない。なるほど、養育者との濃密な交流によって形成される情緒的な絆や愛着が際立った役割を果たす、幼少期における依存と、養育者との関係から比較的、自立している成人以降の依存は、連続性もあるが断絶もある（ボウルビー 1993 [1989]）。しかし、いずれにせよ、情緒的な安らぎのある生活には、「誰かにケアされる」という形での依存が不可欠であろう。

そして、ここで論点をさらに付け加えるなら、こういった情緒的な依存は、自尊感情と他者一般への基本的信頼感にとって、無視できない重要性をもつ。すなわち、身近な他者によって気遣われ、大切にされることを通して情緒的なニーズが満たされると、「自分は大切にされるべき価値のある存在なのだ」という、人間らしく生きていくうえで基本的な自尊感情が育まれる（西澤 2010：33-4）。そして、こういった自尊感情は、他者に大切にされる体験を通して与えられるものであるから、同時にその体験を通じて、他者に対する基本的信頼感——他者を過剰に警戒しなくても大丈夫だという感覚——も育まれることになる。こういった自尊感情と他者への基本的信頼感も、自他の結びつきの中で営まれる人間の生活にとって不可欠なものであろう。

第二に強調すべき点は、依存が「生存のためだけでなく文化の発展それ自体のためにも重要である」(Kittay 1999: 29=キテイ 2010: 82)とされている点である。この論点はキテイにおいて言及されるにとどまり、掘り下げられているわけではない。しかし、私の考えでは、この論点は掘り下げるべき重要な含意をもつ。キテイがどこまで賛成してくれるかはともかく、ここでの文化的発展は、少なくとも、文化的に適応した生活ができるようになることと、文化的に成熟した生活ができるようになることとに、大きく分けることができると思う。

まず文化的な適応においては、身近な他者と、何らかの対象・主題に関して関心を分かち合う共同注意によって、社会的に流通している様々な概念を習得し、周囲の世界や自己に関する様々な事柄を分節化できるようになる。またそういった分節化を通じて同時に、文化的に慣習化している振る舞いのパターンを身に着けていく<sup>(11)</sup>。ここにおいても、他者にケアされる——気かけられ、気遣われる——という依存が、文化的に慣習化している振る舞いのパターンの習得を促進するという点で重要な働きをする。

もう一つの段階である文化的な成熟をどう捉えるかに関しては、ギリガンの成熟概念が示唆的である。ギリガンの著作 (Gilligan 1982) から読みとれるのは、次のことである。すなわち、成熟というものが、既存の文化的慣習や社会的制度——例えば男性に有利に設定された慣習や制度——に従ったり、順応したりすることではなく、そういった支配的な慣習や制度によって、誰かが不当に抑圧・排除されていないかといった、社会的抑圧や社会的排除に関する批判的な問題意識がもてるようになることを含む点である (ibid.: 151-74)<sup>(12)</sup>。その際に重要になるのが、文化的・社会的に支配的な声とは「異なる声」に丁寧に耳を傾けることである。ギリガンは中絶を体験した女性たちへのインタビューをする。そして、「彼女たちが、社会的に押しつけられた女性役割に過剰に同調することによって、他ならぬ自分自身の存在を排除し犠牲にしていたということに気づき、様々な葛藤と苦悩の中で自分自身の(新たな)異なる声を大切にするようになる」というプロセスを明らかにしている。そのうえでギリガンは、その女性たちが自分自身の異なる声に耳を傾けるようになることが、成熟する上で欠かせない点を論じている (Gilligan 1982)。

ここでギリガン自身は指摘していないけれども重要なことは、おそらくギリガンが、また周囲の支援的な他者たちが、その女性たちの声にケアした——気かけ、気遣った——からこそ、彼女たちは自分自身の異なる声を発見し、その声に耳を傾けることが可能になったのではないか、ということである<sup>(13)</sup>。自分自身が長年馴染んできた見方や振る舞い方を、批判的に問い直すような声に耳を傾けることは、容易なことではないだろう。それは、これまでの自分自身が安住していた欺瞞や幻想に気づくことでもあるから、怖気ついてしまい、そのような声に耳を塞ぎたいという強烈な衝動に駆られてもおかしくない (早川 2016)。だからこそ、そういった異なる声に耳を傾けることができるようになるためには、他者によるケアが、すなわち、その異なる声を聞き届けてくれるような他者の気遣いが、やはり必要のように思える。だとすれば、文化的な適応のみならず、このような文化的な成熟もまた、他者にケアされるという依存を条件としていることになる。



以上のように見ると、「誰かにケアされる」という形での依存は、自尊感情や他者への基本的信頼の育むような「情緒的に安らぎのある生活」のみならず、社会的抑圧や排除に批判的意識を伴うような「文化的に成熟した生活」にも、不可欠であるように思える。

ただし、このことは、「ケアされる」ということが、そういった情緒的な安らぎや文化的な成熟を保証するということを意味しているわけではない。多くのフェミニストが強調してきたように、ケアの一つの主要な場となる家庭は、暴力と支配の場でもあり、そこでは、まさに「ケアされる」ことを通して、その人の尊厳を脅かすような抑圧的な規範や慣習が内面化され再生産されたりもする (Nussbaum 2000 : chap. 4)。この点を重く受け止めなければならない。だからこそ依存は様々な難しい問題ををはらんでいる。依存がこれまであまりに否定的に捉えられてきたからといって、肯定一辺倒な捉え方をすることもできない。むしろ肯定的側面と否定的側面が複雑に入り混じったものとして、依存を考えていかなければならないだろう。

しかし、この点を認めたくえでも、情緒的な安らぎのある生活のみならず、文化的に成熟した生活にとっても、「誰かにケアされる」という形での依存——以下では便宜上「ケア的依存」と呼ぶことがある——が、重要な必要条件になっているとは言える (十分条件とは言えないものの)。私がここで確認したいのは、この基本的な点である。そして、ここでさらに、情緒的な安らぎのある生活のみならず文化的に成熟した生活をも含みこんだものとして、人間らしい尊厳のある生活というものを捉えるなら<sup>(14)</sup>、まさにケア的依存が、そういった尊厳のある生活に不可欠だと言えるだろう。

## (2) 脆弱性 (vulnerability)

脆弱性 (傷つきやすさ・脆さ) とは、自らのコントロールを超えるような仕方、意のままにならないような仕方で影響を被る可能性、すなわち翻弄される可能性のことである (Gilson 2014 : 2)。とりわけケアの倫理の論者が注目する脆弱性とは、人間が意のままにならない仕方で何らかの害悪を被る可能性である。

多くの論者が指摘しているように、ここで強調すべき点は、「ケアされる」という形での依存の必要性が、まさにこの人間存在の脆弱性に由来している点である。先に確認した依存の必要性から、容易に人間の脆弱性も見えてとることができる。

もし私たちが、他者にまったく関わらなくても、また他者からどんなにひどい扱いを受けようと、例えば他者からニグレクト・搾取・支配・虐待・暴力をどんなに受けようと、生存が脅かされず (すなわち、生存に関わる脆弱性がなく)、また全く取り乱すことなく平然としていて (すなわち、情緒的な脆弱性がなくて)、さらに自尊心や他者への基本的な信頼感が損なわれない (すなわち、自他の信頼に関わる脆弱性がない) としよう。そのような強靱さと自己充足性を備えた存在であったならば、そういった生存的・情緒的・信頼的な側面を育むために、他者からケアされる必要はなかっただろう。また、同様のことは、当然、(上記で論述した意味での) 文化的に成熟した生活を送るという点についても言える。先に確認したように、自らが慣れ親しんでいる文化的慣習によって、不当な抑圧や排除を受けるとき、そういった社会的

抑圧や社会的排除に対する生き難さを声にして抵抗していくためには、その声を聴き届けてくれる他者を必要とする。というのも、支配的な文化的・社会的慣習の圧力によって——周囲の他者のみならず本人もそういった慣習を内在化しているがゆえに——そういった慣習が含む不当な部分を批判的に問う声は、押しつぶされそうになるからである（Gilligan 1982）。重要な点は次のように述べることができる。こういった社会批判的な感受性が育まれるという次元での成熟に対するニーズは、これまでの生き難さから発している切実なものであるが、それは同時に自分では満たすことができないニーズであり、そのような声を支持する他者の存在なしには、その成熟可能性は損なわれてしまう危険性（すなわち成熟に関する脆弱性）がある。

このように、私たちは——もちろん一枚岩であるような「わたしたち」など存在しないので、この言葉を使うのは憚られるが——様々な点において脆弱性を抱えるからこそ、その脆弱性を補うような依存が必要になってくる。すなわち脆弱性は、依存の必要性の根拠となる形で、依存の必要性と分かちがたく結びついているのである。

そして、先に依存について確認したことが脆弱性についても言える。すなわち、生存・情緒・自尊心・他者への信頼感・成熟といったものが人間らしい尊厳ある生活の重要な構成要素であることを踏まえるならば、私たちは、そのような尊厳ある生活を損なうような害悪を被る可能性、すなわち、人間の尊厳に関する脆弱性を、一様ではない仕方ではあるが、抱えていると言えるのである<sup>(15)</sup>。

さらに次の点も留意すべき重要性をもつ。ケアの倫理の多くの論者が強調するのは、脆弱性をめぐる問題を、ケアされる側に狭く限定してはならない、という点である（岡野 2012）。キティによれば、ケアされる側のみならず、ケアする側も、それがとりわけ女性の場合、虐待・搾取・抑圧・排除を被る危険性が高く、それゆえ脆弱性を深刻な仕方では抱えている。とりわけ、「高齢者介護で、男性をケアする場合、介護者は性的虐待や経済的搾取、粗末な扱いにさらされる恐れがある。危険にさらされる可能性は、依存労働者〔ケアを担う者〕が貧しかったり、女性であったり……する場合にはより高まる」（Kittay 1999：65＝キティ 2011：152。なお大括弧内の補足は引用者、以下同様）。とりわけ自分の利害や計画を後回しにして、世話・介護に従事することを強いられている多くの女性にとって、ケアされるという形——気かけられ、気遣われ、大切にされるという形——での依存の必要性は、切迫性を帯びることになるだろう（ibid.）。このようにケアする責任を押しつけられる数少なくない女性は、その尊厳を傷つけるような暴力や搾取に対する脆弱性が顕著に見いだされうるから、その脆弱性もまた、「ケアされる」という形での依存の必要性と分かちがたく結びついているのである（ibid.）。

### （3）応答責任／応答義務

上記で確認した、脆弱性、および脆弱性に由来するケア的依存の必要性は、二つのことを含意する。第一に、単なる生存のためではなく、搾取・支配・抑圧・排除等の不当な処遇から守られた、人間らしい尊厳のある生活を送るためには、誰もが誰かにケアされる必要があり、したがってケアされる権利をもつこと。第二に、自分以外の他者もまた、尊厳ある生活を送る

ためにはケアされる必要があるので、そういった他者に対して、ケアする責任を負うということ。こうして私たちは、尊厳のある生活ためには相互に依存を必要とするから、誰かにケアされつつも、誰かをケアするというのが、私たちの規範的なあり方を理解するうえで、決定的に重要になる。

前節でも簡単に触れたように、ここでの応答責任は、脆弱性を抱える他者のニーズに起因する。脆弱性に関する特徴づけをニーズの観点から次のように捉えることができるだろう。ある事柄Xに関する脆弱性と見なされているところのX（例えば自尊心）が、同時にニードとして妥当性をもつのは、Xが人間らしい尊厳のある生活に必要な場合である<sup>(16)</sup>。この前提に従えば、生存・情緒的な安らぎ・自尊心や他者への信頼感・成熟等は、人間らしい尊厳を構成する要素だろうから、ニーズであると考えることができる。こういった、より基本的なニーズから、ケアされるという形での依存の必要性、すなわち、ケア的な依存に対するニーズが派生する。そして、このようなニーズに対する応答責任——ケアする責任——を私たちは共有しつつ負うことになる。

この点も前節で簡単に触れたが、相手の脆弱性とそれに伴うニーズに由来する応答責任は、自分が意図的に為したことがもたらす害悪によって生じる責任に限定されないものであった。キティによれば、責任は双方の自発的な合意に基づく契約に由来するとは限らない（例えば子供へのケア等）。一定の関係性を満たせばではあるが相手の脆さ／傷つきやすさゆえに、相手に応答することが求められる（Kittay 1999 : chap. 2）。

むろん、そのような応答責任が課されるのは、「相手との関係性が不適切でない場合」であり、応答責任は不当に押しつけられたものであってはならない。例えば、相手との関係性が強制された性格をもつ場合等は、こういった応答責任は阻却される。この点をキティは次のように述べる。

誘拐した当の者のためにニーズを満たす何らかの義務が、誘拐された者にあると考える人はいないだろう。明らかに強制的な状況、すなわち他者を助けに来ることを強制されるような状況は、それ自体不当な状況であるばかりか不正義であり、よって、この状況においては、ニーズに直面した人に対して、異なる状況であれば負うかもしれないような、応答に関するいかなる道徳的義務をも取り消すことは十分に理に適っているだろう。（Kittay 1999 : 61 = キティ 2011 : 145. なお部分的に改訳している）

ここにもケアする立場に不当に追い込まれた人たちに対して、ケアする責任を押しつけることの不正義が言われている。

しかし、こういった不正義に十分に注意を払いつつも、彼女が同時に強調するのは、自発的でも強制によるのでもないような非自発的に始まった関係性がある点であり、その相手の傷つきやすさや相手の欠損により、私たちは応答責任を負いうるという点である。キティは次のように言う。

〔応答義務に関して〕最も一般的で興味深い状況は、その状況が（全く、あるいは明白に）強制されたものでも、自発的に選ばれたものでもないような場合である。このような責任と義務の類は山ほどある。私たちの生活は、こういった、強制されてもいいし、かといって自発的に選ばれてもいいようなつながりに満ち溢れている。それは最も親密な家族関係から、同じ国の国民であること、旅の道連れまでに至る。（Kittay 1999：62＝キティ 2011：146-7）

#### 4. ケアの倫理の鍵概念を取り入れた行為者性概念へ

さて、以上のようにケアの倫理を概観すると、そこでは、少なくとも次のような根本的な論点が導出されていると考えることができる。（1）人間らしい尊厳のある生活をめぐって、私たちが不可避に抱える脆弱性から、「ケアされる」という形での依存の必要性が導き出され、（2）さらに、そういったケア的な依存の必要性から、他者にケアされる権利のみならず、（ある一定の関係性の下ではあるが）他者をケアするという応答責任もまた導出されている。もちろん、これは詳細を抜きにした粗いスケッチにすぎない。また、主としてキティを見てきたので、それは、とりわけキティに見られる発想ではあるだろう。しかし、このような基本的な発想が、ケアの倫理の論者にゆるくは共有されているように思われる（see Gilligan 1982；Held 2006；Noddings 1984；Slote 2001；2007；Tront 1993）。そして、キティが強調するように、この応答責任は、ケアする責任を不当に押しつけられている多くの女性をケアする責任を、中心的なものとして含んでいなければならない。

このように、脆弱性ゆえのケア的依存の必要性が、人間存在に関わる根本的な事実であるのだとすると、（他者にケアされつつも）他者をケアするということが、行為者としての私たちには、中核的な責務として課されることになる。むろん、その責任が各人にどれほど課されるのかは、一律に決まっているのではなく、それを確定するためには、様々な要素を考慮しなければならないように思われる。（とはいえ、概してではあるが、ケアする責任が女性に不当に押しつけられてきたという歴史的経緯を踏まえるなら、概して男性はこれまで以上にその責任を果たさなければならなくなる可能性が非常に高いと思われる）。こういった複雑な点を認めつつも、ケアする責任という論点を真剣に受け止めるならば、「私たちは自らの意図的な行為によってもたらされた害悪に対してのみに責任を負う」とは考えられなくなるのは確かであろう。

ケアの倫理が、このように脆弱性と依存をめぐる人間存在の根本的事実を隠蔽することなく十分に踏まえたうえで、（ケアされる権利をもちつつ）ケアする責任を導出している以上、そこでの応答的な行為者性や応答的な行為者に課される規範的要請は、現実にしちんとした足場をもっている。他方、そういった根本的事実にあまり注意を払わない現代行為論における行為者像、すなわち、応答性が希薄な自足的な行為者性やそこでの規範的要請は、以前ほど説得力をもたなくなるだろう。そして、脆弱性を抱えるがゆえに他者に依存しながらも、ケアする責任を担う応答的な行為者像をより中心に据えて、その具体的内実を解明していくことが重要に



なってくる。

しかし、ここで注意すべき点は、こういったケアの倫理が胚胎する行為者像を重視したからといって、合理的能力・合理的制御・自律（自己統御）といった、これまで中心的であった概念を手放す必要はない、という点である。むしろ、決して手放してはならないと思われる。というのも、合理的能力・合理的制御・自律といった概念は、人間の行為者性を特徴づける際に無視できない重要性をもっており、それらの概念なしには、行為者性に関する満足がいく解明はできないからだ。

他者をケアする応答的な行為者像を中心に据えても、合理的能力・合理的制御・自律といった概念は、なお必要不可欠であろう。例えば、他者をケアする責任があるがゆえに、他者の具体的なニーズに耳を傾けるという行為は、合理的なこと——そうする理由があること、理に適ったこと——として位置づけられることになるだろう。そして、そこでは「他者がそのように要求する背景には、どのような事情＝理由があるのか」を聞き出し把握するという合理的能力が要求されるだろう。また成熟性に対する他者のニーズを満たすためには、ケアする人自身が豊かな感受性をもつとともに、そういった感受性に裏打ちされた高度な合理的能力（理由づけ能力）ももっていなければならないと考えられる。さらに、「他者の訴えを聞くことが重要なことだ」と合理的に判断しつつも、その訴えが自分にとって耳を塞ぎたいような内容であった場合は、自分の振る舞いを、その合理的判断に合致させるような合理的制御が必要になるだろう。最後に自律性に関しては、ケアする責任は、相手を不当にコントロールすることなく、相手にとって大切なことを大切にすることというのを要求する点で、相手の自律性を尊重することを中心的なものとして含むであろう。

以上を踏まえると、重要なことは、合理的能力・合理的制御・自律といった概念を手放すことではなく、その既存の概念的ネットワークに脆弱性・依存性・応答責任の諸概念を新たに加えることで、既存の概念的ネットワークを揺さぶること、さらに、既存の重要概念を新たな諸概念との結びつきの中で再解釈することである。それは行為者性をめぐる事象や規範（実践的合理性）を異なる仕方で捉えることを可能にする。この具体的な細部の作業を行っていくことが今後の課題となる<sup>(17)</sup>。

## 註

- (1) 以下では「現代行為論」と言うときは、1950年代以降、主として英語圏で展開された分析哲学の行為論を指すことにする。
- (2) 現代倫理学が前提としている行為者概念が自足的であるという指摘は、Mackenzie & Stoljar (2001) 等でもなされている。しかし、行為者性概念を主題的に扱う現代行為論においても、それが自足的だという点はきちんと示されていない。本稿ではこの点を現代行為論の代表的論者の考察を概観することで示すことになる。
- (3) 本稿は文化交流茶話会での発表をもとにしているが、当日詳しく論じることができなかった点に関して、内容を大幅に付け加えている。なお、ここで表明される私の問題意識は以前の論文(早川 2011)と通底している。しかし、本稿では、その既出論文と異なり、行為論の大きな流れを記述したうえで、脆弱性・依存性という、ケアの倫理における鍵概念に着目しつつ、論を進め

ることになる。

- (4) さらに、三者ともに先行する理論の不備を補完するような仕方で、行為者性の解明に重要な寄与をしている。合理性は人間の行為者性の核となる特徴であり、それゆえ、合理的な能力や合理的な制御に注目し、その細部を精緻に分析したことにおいて、現代行為論の成果は——その成果の詳細については紙幅の関係上、追うことはできないが——非常に大きなものであったと私は考える。
- (5) アンスコムは、『インテンション』(Anscombe 1957)を書いた当時、予見された結果に対する責任と、意図されたものに対する責任とは異なるとする、二重結果の原理を支持していた。二重結果の原理によると、行為が予見できる悪い結果を伴ったとしても、その悪い結果を意図していない場合は、責任が問えないか軽減されうる(佐藤 2016)。
- (6) 「脆弱性モデル」はGoodin (1985)によって、責任の「自発性モデル」に代わるものとして提示された。とはいえグディン自身が、ケアの倫理の論者であると言えるかどうかは定かではない。しかし、キティが指摘するように、脆弱性モデルは、他者が抱えるニーズに対する応答責任を中心的なものと見なす。その点でケアの倫理に特徴的な責任概念をうまく捉えている。それゆえ、グディン自身はケアの倫理の論者とされないかもしれないが、ケアの倫理に特徴的な責任モデルを、脆弱性モデルとしてここでは、さしあたり規定することになる(Kittay 1999 : chap. 2)。
- (7) とはいえ、アンスコムの行為者性の特徴づけを「応答志向性が希薄でやや自足的」とすることに関して言えば、再度、次のような別の観点からの疑問が生じうる。すなわち「行為者性を特徴づける合理的能力は、他者からの「なぜ?」という行為の理由への問いかけに本人が回答できることである、と考えられているので、そこには応答的な志向が見いだされる」と。しかし、ここで見落としてはならないのは、意図に着眼しつつ行為者性を分析するアンスコムが要請するのは、「他者から問われれば、自分の行為を、(観察によらず)理由を挙げて合理化できる」ということに尽きており、それはミニマルな応答性にすぎない点である。すなわち、自ら合理化しようとした行為を、他者から批判されたとき、その批判に耳を傾け、その行為を中止する・控える・改めるといった意味での、応答性はそこでは要請されていない。また自分が意図的に行為するのに先立って、生じている他者のニーズに応えるべく、(自分の意図的行為についてのメタ発話行為以上の)行為を為すといった応答性は、主題化されていないのである。そういった応答性が、他者との結びつきの中で営まれる人間の生活にとって本質的であるにもかかわらず、である。こういった点は、デイヴィッドソンにもまた当てはまる。
- (8) ブラットマンにおいて、そういった再考慮は限定的な役割しかもたない(Bratman 2012 : 74)。
- (9) ケアの倫理とは別の角度からの批判としてはMackenzie & Stoljar (2001)やVeltman & Piper (2014)といったフェミニストによる関係的な自律論を参照。しかし、概して、こういった関係的な自律論より、ケアの倫理の方が、行為者性の応答次元をより深く考察しているので、本稿ではケアの倫理を参照することになる。
- (10) ケアの倫理の立場には属さないが、人間の依存性と脆弱性を鋭く考察するものとしてMacIntyre (1999)。
- (11) 共同注意に関しては、滝川 (2011) およびRochat (2009) を参照。
- (12) 社会規範による抑圧や排除に対して、敏感な感受性をもつことの重要性を一層強調する点で、ケアの倫理は、共同体主義とは一線を画する。ただしNoddings (1984) に関して言えば、この点は曖昧である。
- (13) ギリガンのインタビュー自体がもちえる、こういった効果については、高木結衣氏のご指摘に負う。
- (14) このような人間の文化的な成熟を含みこむような尊厳概念に関しては、ヌスバウムのケイパビリティ・アプローチからアイデアを得ている(Nussbaum 2000)。
- (15) そもそも、どのような状態が脆弱性——害悪を被る可能性という意味での脆弱性に、ここでは限定する——と見なされるのかは、人間らしい尊厳のある生活(もしくはそれを構成する諸々

の善)をどのようなものとして捉えるのかに左右される。仮に尊厳のある生活が、単なる生存に切り詰められるなら、脆弱性は、生存に関する脆弱性のみを意味してしまうことになる。それゆえ、何が脆弱性に含まれるのかに関して踏み込んだ考察をしようとするならば、尊厳のある生活の構成善が、どのようなものかについても、考えなければならなくなる。実はこの点に関する主観的考察は、概してケアの倫理の論者よりも、人間開発の観点から尊厳を解明する Nussbaum (2000) に一層ははっきりと見いだされる。

- (16) こういった前提は、Nussbaum (2000) や Nussbaum (2001) から読み取ることができ、その意味で、これらの著作に負っている。
- (17) 本研究は JSPS 科研費 (課題番号 15K02010) の助成を受けたものである。

## 参考文献

- Anscombe, E. (1957), *Intention*, Basil Blackwell. (『インテンション』、菅豊彦訳、産業図書、1984 年)
- Anscombe, E. (1995), "Practical Inference," In *Virtues and Reasons: Philippa Foot and Moral Theory: Essays in Honour of Philippa Foot*, eds., R. Hursthouse, G. Lawrence, and W. Quinn, Clarendon Press, 1-34. (『実践的推論』早川正祐訳、『自由と行為の哲学』(門脇俊介・野矢茂樹編・監修)、191-258, 2010 年)
- Arpaly, N. (2003), *Unprincipled Virtue*, Oxford University Press.
- Bratman, M. (1987), *Intention, Plans, and Practical Reason*, CSLI Publication. (『意図と行為』、門脇俊介・高橋久一郎訳、産業図書、1994 年)
- Bratman, M. (2007), *Structures of Agency*, Oxford University Press.
- Bratman, M. (2012), "Time, Rationality, and Self-Governance," *Philosophical Issues* 22 (1), 73-88.
- ボウルビー、ジョン (1993 [1989])、『母と子のアタッチメント——心の安全基地』、二木武監訳、医歯薬出版株式会社。
- Davidson, D. (1980), *Essays on Actions and Events*, Oxford University Press. (『行為と出来事』、服部裕幸・柴田正良訳、勁草書房、1991 年)
- Evnine, S. (1991), *Donald Davidson*, Stanford University Press. (『デイヴィッドソン——行為と言語の哲学』、宮島昭二訳、勁草書房、1996 年)
- Frankfurt, H. (1988), *The Importance of What We Care About: Philosophical Essays*, Cambridge University Press.
- Frankfurt, H. (1999), *Necessity, Volition, and Love*, Cambridge University Press.
- Frankfurt, H. (2004), *The Reasons of Love*, Princeton University Press.
- Geach, M. and Gormally, L. (2005), *Human Life, Action and Ethics: Essays by Elizabeth Anscombe*, Imprint Academic.
- Gilligan, C. (1982), *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's Development*, Harvard University Press.
- Gilson, E. (2014), *The Ethics of Vulnerability: A Feminist Analysis of Social Life and Practice*, Routledge.
- Goodin, R. (1985), *Protecting the Vulnerable: A Reanalysis of Our Social Responsibilities*, The University of Chicago Press.
- 早川正祐 (2011)、「ケアにおける他者感受的な行為者性」、『哲学科紀要』第 37 号、上智大学文学部哲学科、37-61。
- Hayakawa, S. (2015), "The Virtue of Receptivity and Practical Rationality," In *Moral and Intellectual Virtues in Western and Chinese Philosophy: The Turn toward Virtue*, eds. C. Mi, M. Slote, and E. Sosa, Routledge, 235-51.
- 早川正祐 (2017)、「苦しみの認知からの逃避と認識をめぐる責任——ケアの認識論に向けて」、『グリーンフケア』第 5 号、上智大学グリーンフケア研究所、95-110。

- Held, V. (2006), *The Ethics of Care: Personal, Political, and Global*, Oxford University Press.
- 門脇俊介 (1996)、『現代哲学』、産業図書。
- 数井みゆき・遠藤利彦編著 (2005)、『アタッチメント——生涯にわたる絆』、ミネルヴァ書房。
- Kittay, E. (1999), *Love's Labor: Essays on Women, Equality and Dependency*. (『愛の労働あるいは依存とケアの正義論』、岡野八代・牟田和恵監訳、白澤社、2010 年)
- Kittay, E. (2009), "Ideal Theory Bioethics and the Exclusion of People with Severe Cognitive Disabilities," In *Naturalized Bioethics* eds. H. Lindemann, M. Verkerk, and M. Walker, Oxford University Press, 218-37.
- MacIntyre, A. (1999), *Dependent Rational Animals: Why Human Beings Need the Virtues*, Open Court.
- Mackenzie, C., Rogers, W., and Dodds, S. (eds.) (2014), *Vulnerability: New Essays in Ethics and Feminist Philosophy*, Oxford University Press.
- Mackenzie, C. and Stoljar, N. (eds.) (2000), *Relational Autonomy: Feminist Perspectives on Autonomy, Agency, and Social Self*, Oxford University Press.
- 西澤 哲 (2010)、『子ども虐待』、講談社現代新書。
- Noddings, N. (1984), *Caring: A Feminist Approach to Ethics and Moral Education*, University of California Press.
- Nussbaum, M. (2000), *Women and Human Development: The Capabilities Approach*, Cambridge University Press. (『女性と人間開発——潜在能力アプローチ』、池本幸生・田口さつき・坪内ひろみ訳、岩波書店、2005 年)
- Nussbaum, M. (2001), *The Upheavals of Thought: The Intelligence of Emotions*, Cambridge University Press.
- 岡野八代 (2012)、『フェミニズムの政治哲学』、みすず書房。
- Rochat, P. (2009), *Others in Mind: Social Origins of Self-Consciousness*, Cambridge University Press.
- 品川哲彦 (2007)、『正義と境を接するもの——責任という原理とケアの倫理』、ナカニシヤ出版。
- 佐藤岳詩 (2016)、「アンスコム、“Modern Moral Philosophy”の処方箋」、『先端倫理研究』第 10 号、5-24。
- Slote, M. (2001), *Morals from Motives*, Oxford University.
- Slote, M. (2007), *The Ethics of Care and Empathy*, Routledge.
- Slote, M. (2013), *From Enlightenment to Receptivity: Rethinking Our Values*, Oxford University Press.
- 滝川一廣 (2011)、「自閉症と言葉の発達」、松永澄夫編『言葉の歓び・哀しみ』所収、東信堂、127-63.
- Tront, J. (1993), *Moral Boundaries: A Political Argument for an Ethic of Care*, Routledge.
- Veltman, P. and Piper, M. (eds.) (2014), *Autonomy, Oppression, and Gender*, Oxford University Press.
- Young, I. (2011), *Responsibility for Justice*, Oxford University Press. (『正義への責任』、岡野八代・池田直子訳、岩波書店、2011 年)